

IOBBB #28

The Institute of Barbarian Books

2019年6月に香港で反送中運動が起きてから半年、抗議者たちは今もなお声を上げている。12月上旬、東京で開催されたZinester Gatheringで友人たちと久しぶりの再会を果たした後に私たちはその「半自律」状態の香港を訪れた。香港の状況は日本のニュースでも連日報道されていたが、実際に街を訪れるとまるで普通の日常が広がっていた。もっとも最近では地区議会選挙と香港理工大学で起きた激しい衝突とが相まって多くの人々は疲労困憊しているようだった。「今はみんな一時休憩かな」と友人は言う。とはいえ、街に漂うエネルギーと反乱の空気ははっきりと感じる事ができた。日常生活の根底にある抑えられた焦燥感と抵抗感——この土地の権力の構造プレートは、人々の足の下でまだぐらぐらと揺れ動いている。

私たちを乗せたバス^{*1}は人通りの多い九龍(クーロン)の油麻地(ヤウマテイ)に到着した。バスを降りてすぐに出迎えてくれたのは、彌敦道(ネイザンロード)にある道路の仕切りにスプレーで大きく描かれた「Fuck the Popo(警察なんてクソくらえ)」の文字。私たちが香港にいることを改めて実感する。

今回香港の抗議デモがこれだけ大きく急進した最大の原動力は人々の「警察への怒り」であることはもはや周知の事実だとは思いますが、これは何度も強調されるべき重要な点だと私は思う。武装していない学生やマスコミに対する残虐な行為、政府支持派ギャングとの共謀、抗議者誘拐および殺人の示唆、大規模な逮捕^{*2}、国際的人権団体の内部調査要請^{*3}を完全拒否するなど、数え切れない警察の不当な行為に対する不信感と怒りが世代を超えて香港人を団結させている。

こんなことを言うのは正直気が進まないが、警察による武力行使は今回が初めてではない——マスメディアが恣意的に報道を避けているだけで、今この瞬間も世界中の警察機関で全く同じ手段が用いられている。そういう点では約6ヶ月もの間、世界中のマスメディアが報道し続けた今回の香港抗議デモは“特別”なケースだった。香港警察が無防備な群衆に催涙弾^{*4}を放ち暴行する光景や、さらにはデモ隊を実弾で射撃する映像は実際に国際的な注目を集め、世界中から「民主主義」要素を支持する声が上がったのだ。それにもかかわらず、中国政府はその不寛容の姿勢を崩すどころか強化させていった。



2

このように国際組織ですら進行中の不当な武力行使に介入できない状況は、現代社会のパラドックスを際立たせている。「権力構造の維持」という形をとって上から下へと行使される警察による暴力行為とその免責——それらは一般的に「法律」と呼ばれている。一方で警察への抵抗や自己防衛など、権威に疑問を投げかけて取り崩そうとする下からの攻撃的な行為は全て、当たり前のように暴動・略奪・破壊行為として退けられてしまう。「犯罪」というラベルを貼られて。現在、この二分法的思考に対する異議を唱えるたくさんの人々が世界中の都市で連帯を示している。私はこの傾向が、権威というものがどれほど脆弱かを証明する良い例になるのではないかと信じている——上の彼らが抱くむなしい幻想は、矛先が向けられたその瞬間から崩れ落ちるのだ。

街中のいたるところで「狗官」という文字がスプレーで書かれているのを目にした。「狗＝犬、官＝警察」を意味し、警察を罵るスラングだそう。地下鉄や大通り、警察署の近くでは特に大きく書かれている。文字の横には毎回必ず「小江(シウ・ゴン)」というサインが添えられていた。巧みに姿をくらませながら街中に数え切れない爪痕を残していく謎めいた作者「小江」はいつの間にか香港民主化運

動の伝説的な存在になっていったという。彼がサインを残し続けるのは「私の名前を忘れるな」という、権力を乱用する警官へのある種の不吉なメッセージだそう。友人のNは、ある夜に猛烈な速さで壁にスプレーし素早く消えていく「小江」を見たそうだが、マスクで隠された顔と黒い服で包まれた彼の存在は未だに謎のままだという。「小江」のストーリーを聞いてからというもの、街中でそのサイン*5を横切るたびに彼の姿を思い浮かべてはニヤリと笑ってしまう私たちがいた(香港のどこへ行っても15分置きにニヤリとすることになる)。

3



Nは催涙弾についても話してくれた。言葉では言い表せない臭い。その場を去ってからもずっと続く痛みを伴う咳。刺激が強い中国製の催涙ガスへと切り替えられた時、その多くは有効期限の部分が削って消されていたという。香港警察により無差別に放たれた催涙弾は、デモに参加していない周りの市民にまでその被害を広げた。

NとMはグラフィティの喜びについても語った。考え抜かれた(ときに無意識に生まれた)メッセージやドローイングを路上に残す喜び。お互い名前も知らない仲間達が集まり傘や携帯で作業する自分たちを隠し守ってくれる喜び。自分たちが残したグラフィティの前を日中に通り返り過ぎてはクスクスと笑う喜び。他のグラフィティ愛好家が自分のグラフィティに注釈を追加したり修正したり、フレンドリーなメモを残したりしてコミュニケーションが生まれる喜び。

人々のメッセージで溢れた街は、なんだか生き生きとしていた。国はその清掃作業に全く追いつけていないようだった。グラフィティ同士は会話し、グラフィティは通行人にも語りかける――街中のビルの壁や道路の間を流れるのは、まさに「生きた対話」だ。まるで鉄とガラスで出来た世界貿易と資本主義のシンボルに赤い血が注ぎ込まれたかのように、そこには命が漲っていた。

水曜日、Jが彼の車で新界(ニューテリトリー)にある馬屎埔村(マシポ村)まで連れて行ってくれた。馬屎埔村という小さな村は抵抗の縮図であり、香港の北東新領土開発に反対する農民と土地防衛者の集合地点でもある。馬寶寶社區農場(マポポ・コミュニティ・ファーム)^{*6}という小さな有機農園が中心となって毎週ファーマーズ・マーケットを開催していて、マシポ村の支援者や新しい訪問者がワークショップに参加したり開発計画の最新情報を学ぶための集まる場所として機能している。

私たちが訪れたこの日、マポポファームの中は静かだった。東に数百メートル先の方に見える建設用クレーンから響き渡る絶え間ない騒音を除いては。村民の一人であるBにマシポ村の中を案内してもらった後、小さな野菜売場の横にあるテントの下でBの家族や友人たちと一緒に昼食をご馳走になった。マポポファームで取れた新鮮な有機野菜を使った鍋と手作り餃子、最高だった。畑を見せてくれるというのでBのあとについて狭いコンクリートの小道を進んで行くと、そこは多様性に満ちた植物と野生生物^{*7}で溢れていた。生命のエネルギーに圧倒される私たちを見下ろすように、振り返ればそこにはいつでも40階以上はあるであろう高層ビルがそびえ立っている。そのあまりにも恐ろしく威嚇的なそのコントラストを見た途端、私の気分が悪くなった。

4

マポポファームに響き渡る建設音は、パレスチナのビリンで私が訪れた小さな有機農園、オムスレイマン農園^{*8}を思い出させた。2つの農園には多くの共通点がある――マポポファームは土地開発者や不動産開発者からの絶え間ない立ち退き要請に直面し、オムスレイマン農園は国家拡張と政治的大虐殺という名の下にイスラエル政府とイスラエル国防軍からの脅威に直面している。共通するもう一つの重要な要素は「農業による抵抗」だ。デモの最前線でバリケードを作る香港の若者たちや、銃を構えるイスラエル兵に石を投げつけるパレスチナの若者たちのように純粋な抵抗作戦を取る代わりに、彼らは争われる土地の土を耕し植物・命を育て、人々と健康なコミュニティを共有することで、創造することの大切さ強調しているのだ。

マポポファームに掲げられた大きなバナーには「耕住合一(農業と生活は二つで一つ)」と書かれていた。――資本主義の論理に反対するだけでなく新しい生き方を指すスローガンは、この場所にぴったりだ。ここで暮らす人々にとって、農業は目的を達成するための手段ではなく、この社会について考えどう生き抜いていくかを考えるため新しいの方法なのである。マポポファームのプロジェクトが現在の香港の抗議デモにどのように関わっているかは今のところそれほど明確ではないが、彼らの闘いの核心はオムスレイマン農園とともに、世界中の権威に対する様々な対立と本質的に関連していると感じている。

私たちはヤウマテイのSo Boring(ソーボアリング)^{*9}に持って行くために、マポポの野菜を幾つか買った。ソーボアリングは若者が中心となり自治的に運営されている協同組合のお店&インフォショップで、基本的に素食(ビーガン料理)を自由定価のシステムで提供しているが、さまざまな政府機関から継続的な嫌がらせを受け続けているのは言うまでもない。歩道にテーブルといろいろな形や大きさの椅子が並び、店の中の厨房から運ばれる野菜や豆腐が次々と鍋に詰め込まれて行く。古い友人や新しい友人と同じ鍋を囲み、語り合う時間。私たちはソーボアリングのような空間がどれだけ大切かを改めて気がつかされた。人々が集い語り合える場所。ただそれだけなのに、心もお腹もいっぱいだった。

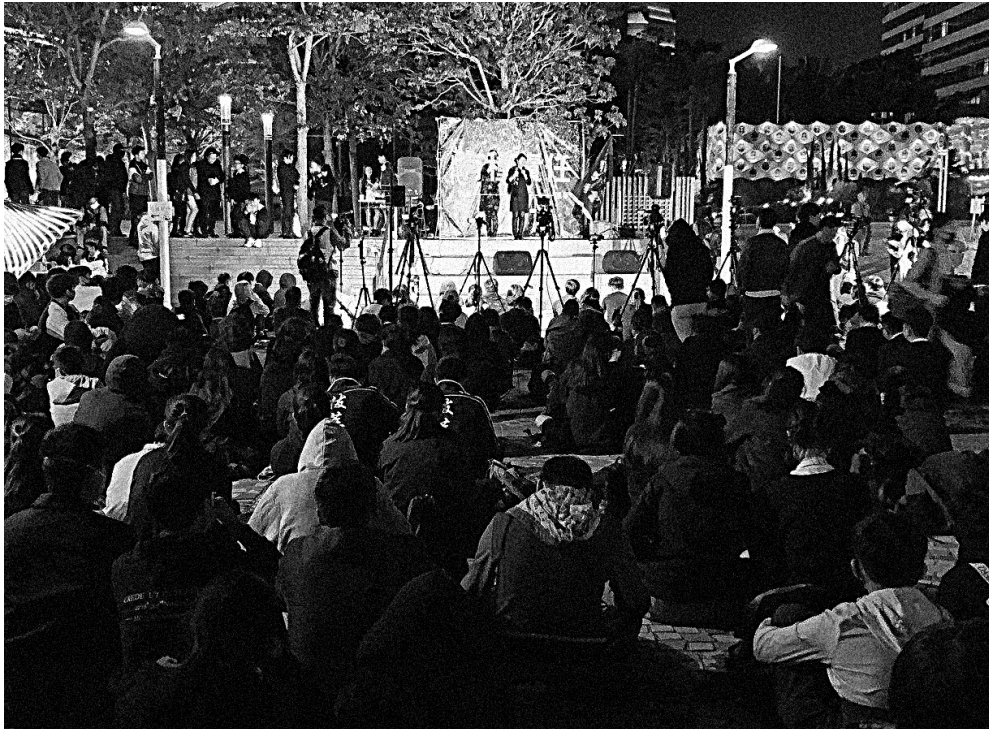
5



鍋をつまみながら木版画コレクティブについてDと話をしていると、Printhow^{※10}のメンバーの一人が、移民の誇りを表すために移民労働者の人たちと一緒に作ったバナーを見せてくれた。ソーボアリングの二階には韓国のアクティビストたちが濟州島(チェジュ島)の海軍基地反対のために作った印刷物などが掲げてあり、私たちの友人でもある東京のA3BC木版画コレクティブ^{※11}の作品も見つけることができた。共同印刷のパワーは強い。コミュニティを構築し、自分自身のストーリーを埋め込みながらイメージを生み出す力を人々に与えることができる。木版画コレクティブは、国境や海を越えて私たちをつなぐ糸であり、別の世界を創造するために、抵抗の地と人々をつなぎ合わせる。私たちはそのあともおしゃべりしたりZINEを交換したり、暖かいお茶を飲んだりして、今年最後の満月の下で12月の夜をソーボアリングのみんなと楽しんだ。

金曜日の夕方、私たちは友達と待ち合わせて、中学生たちが集会を開いているという尖沙咀(チムサーチョイ)の科学博物館に向かって南に歩き出した。Mが私たちにマスク^{※12}を手渡す。抗議デモが始まって以来、匿名性というコンセプトはすぐに抗議参加者たちによって受け入れられた——安全で実用的でありながら「指導者のいない運動」の力強さを強調するツールとして、マスクは象徴的な存在になっていった。私たちが博物館前の広場に到着する頃にはすでに多くの中学生が集まっていて、そのほとんどが学生服の上に黒いパーカーとジャケットを着てステージの前に座っている。集会自体は想像していたよりも形式的で、学生が順次に交代でステージに上がり、マイクを持って自分たちの気持ちを叫んでいく流れで進んでいった。ステージと群衆の間を何度も呼応するのスローガン^{※13}。厳格な雰囲気の子供が掲げる悪名高き黒い旗。FREEHKと書かれたLEDのネオンサインの前で記念撮影をする通行人。ネオンサインの後ろでは、Mの友人であり運動の支援者でもある年配の男性が小さな机を広げてマスクや衣服などを並べていた。参加者、特に生徒のために無料で物資を配布しているという。

Mが広東語を同時通訳してくれたおかげで私たちもついていくことができた。集会はうまく構成されていてスムーズに進行しているように見えたが、学生たちの興味深く勇ましい姿を見せつけられることになる。学生たちから別の表情が垣間見えたのは、2人の年配の話し手^{※14}がステージの上に上がった時だった——彼



8

らは親心の姿勢で学生達に歩み寄ったのだ。正直、ステージで一生懸命声を上げる子供達を見て私自身親心を感じなかったと言えば嘘になるが、2人が強調した非暴力的な抵抗と選挙政治への信仰という概念については私は反対だった。特に、これまで失敗に終わった学生主導の運動、最も最近の雨傘運動でも繰り返された「トップダウンの姿勢」を漂わせていたのが不快だった。まさに大人が子供を指導するような姿勢で歩み寄ろうとしていた2人とは対照的に、中学生たちがここで訴えたいのはもっと現実的な問題なのだ——個人的な体験の共有、警察による暴力に対する連帯、次の集会のための情報収集。みんなで構成し、共有し、さらなる行動に向けて準備することが本当の水平的(上も下もない)な方法ではないだろうか。

また別の政治家がステージに立っている間、私は最近読んだ世界中で沸き起こる反乱運動についてのニュースを思い出していた。香港が前進するために必要

なのは、同様に政府や警察と闘う他の土地や人々との連帯だ。私たちの間をつなぐ輪郭を絶えず追跡し、あらゆる権威を否定し排除することを目指す交差点を強調することが必要だと私は思う。香港の貧困^{※15}はハイチまたはチリの貧困と関連づけることができ、どちらもシステムに対する人々の嫌悪感と怒りの結果として抗議運動が発生したことも簡単に理解できるだろう。その他にも、例えばイラクと香港も関連づけることができる。香港警察による殺人が未だに公然と検証されていない一方で、今年イラクでも反政府抗議が始まって以来、アクティビストを捕らえて殺し400人以上の抗議者や無実の犠牲者を出した警察たちがファンファーレで歓迎されている。このような関連を示す報道は語られる価値があるものであり、私たちがさまざまなメディアを駆使して、意識的な協力と相互扶助のために何ができるか挑戦するに値するものである。マポポフォームやオムスレイマン農園などの創造的な抵抗の例も共有することもできるし、また西クルディスタンのRojava(ロジャヴァ)自治区やメキシコ・チアパスの先住民Zapatistas(ザパティスタ)主導の抵抗など大規模に抵抗を広げる土地についての情報も参考になるだろう。もちろんそれぞれの土地の問題背景は様々で独特だが、グローバルな連帯とは、共通の敵よりもはるかに多くを私たちが共有しているということ認識してこそ機能するのだ。

9

政治家のたいくつな話が終わったあと、13歳にも満たないように見える少年がマイクを取り大声で話し始めると群衆は再び目を覚ました。私は冷たいレンガの地面に座って周りを見回す。こんなに熱心に誰かの話に耳を傾ける若者に囲まれたのは久しぶりだった(携帯電話をスクロールする人すら見当たらない)。日本でも学生主導のこんなイベントがいつか起きるだろうか…正直今は想像できない。集会も終盤に迫る頃、私は顔に黒いマスクをした女の子を見つけた。彼女はパンがたくさん入ったバッグを抱えて群衆の中をゆっくりと歩き、空腹の人に温かいパンを配っている。この小さな瞬間に、私は再び大きな希望を感じた。この都市の未来は、彼女のような人々の手にある。

広場に集まる人々の顔は、巨大な広告の光と、港の反対側にある香港島に立ち並ぶ贅沢なネオンによってぼんやりと照らされている。低空飛行する飛行機が、遠くで警戒している警察たちの頭上と私たちの頭上をまっすぐに飛んで行った。

香港——植民地主義と資本主義の歴史によって破壊されたこの場所の中心
で、私たちは今みんなと一緒に座り、耳を澄まし、呼吸し、感謝し、別の世界が可能
であることを証明しようとしている。

このような暴力的な抑圧や国の権力に直面しながらも一歩も下がることなく闘
争し続ける香港人^{※16}に勇気づけられたことは間違いないが、同時にこの抗議運
動には警戒すべき側面もあると感じたのも事実だ。運動の一部が民族主義や選
挙制度への信仰に傾くようなものについては、私は絶対に反対である。
街を旅し、運動の空気を感じ、学び、地元の人たちから直接実際の体験談を聞く
ことはどんな間接的な情報にも変えがたい特別な経験だ。グローバルな連帯を
より理解し実践できる最高の機会だと私は思う。何よりも、人のつながりの大切
さを実感する。私たちも友人たちの助け合いがなければ今回の旅を実現するこ
とはできなかった。すべての人に心から感謝の気持ちを伝えたい。

[脚注]

- ※1 地下鉄を運営する香港鐵路が警察と政府軍に協力したとして、抗議者たちは地下鉄の利用を全面的にボイコットした。
- ※2 2019年12月の時点で約6,000人を超える抗議者が逮捕された。
- ※3 アメリカに本部を置く国際的な人権団体「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」は2020年1月に香港に出国を試みたが、
中国政府と香港政府は彼らの出国を認めず、調査に対する協力の姿勢を一切見せなかった。
- ※4 これを書いている今の段階で、約16,000もの催涙弾が使用されている。
- ※5 小江が残したサインの多くは、アラン・ムーア作のコミック『Vフォー・ヴェンデッタ』で有名な「V」のロゴも併せられていた。
- ※6 マポポ・コミュニティ・ファーム www.mapopo.wordpress.com
- ※7 特に鳥たちが美しかった。自然が豊富なマシポ村に魅了されて集まってくる鳥たちも、皮肉なことに、
畑で野菜を作る農家にとっては迷惑な存在になってしまう。
- ※8 オムスレイマン農園 www.facebook.com/omsleimanfarm
- ※9 ソーボアリング www.facebook.com/wearesoboring
- ※10 プリントハウ www.facebook.com/printhow
- ※11 A3BC木版画コレクティブ www.a3bcollective.org
- ※12 香港政府のキャリー・ラムは2019年10月に抗議デモ参加者がマスクなどで顔を覆う行為を禁じる「覆面禁止法」を制定した。
- ※13 「5つの要求、ひとつも譲らない。自由のために戦う、香港とともに！」
- ※14 ジャーナリスト/政治家のClaudia Mo(クラウドディア・モー)と、政治家のRaymond Wong(レイモンド・ウオン)。
- ※15 公式な数値によると世界で最も裕福な都市の1つである香港では約137万人(18.3%)の人々が貧困線以下で生活している。
- ※16 抗議運動を支持するすべての人々、特に周縁化された人々や住民カードを持たずに都市に住む人々を含めるために
「香港人」という表現を幅広く使用する。

Half a year after the anti-extradition bill movement be-
gan in Hong Kong, protesters are still flowing. We visited
the “semi-autonomous” city in early December after meet-
ing with friends at the annual zinester gathering in Tokyo.
For the most part, things were quiet despite the circum-
stances; the recent district council elections compounded
with the siege at Polytechnic University seemed to have
left many exhausted and in need of a break. That being
said, there was a palpable energy, a scent of insurrection in
the air, an exciting undercurrent of restlessness and resis-
tance—a feeling that the tectonic plates of power are still
shifting below everyone’s feet.

Arriving by bus¹ in the busy Yau Ma Tei neighborhood
of Kowloon, we were immediately welcomed with a friend-
ly reminder sprayed on to the concrete divider of Nathan
road: **Fuck the Popo.**

I think it’s worth reiterating how much the anger at police
have mobilized and radicalized the movement. From the in-
cessant brutality against everyone from unarmed teenagers
to the press, to their collusion with pro-government gangs,
to the kidnapping and possible murders of protesters, to
the massive arrests² and their complete refusal to compro-
mise or even submit to an external investigation,³ Hong
Kongers across generational lines are united in distrust and
fury towards the police.

1. A semi-boycott has been called against Hong Kong’s MTR train system for their collaboration with the police and State forces.

2. Over 6,000 and counting in December, 2019.

3. An international team of experts hired to “watchdog” Hong Kong’s police quit in early December, unable to find cooperation from within the HKPF.

I'm hesitant to say their use of force is unprecedented—after all, police institutions across the globe use the same exact tactics daily and are barely acknowledged by mainstream press. But what is unusual in Hong Kong's case seems to be exactly this; after six months of constant coverage (which on the whole tend to be supportive of “pro-democracy” elements), despite the constant flow of images documenting police firing tear gas⁴ into defenseless crowds, beating, and even shooting protesters with live ammunition at point blank range, the Chinese government continues to double down on its no-tolerance stance.

The inability from international organizations to intervene in the ongoing aggression highlights a paradox in modern society; the violence and impunity the police act with, when coming from above in the form of protecting systems of power, is simply what we commonly refer to as the “law.” On the other side, the resistance, self-defense tactics, and offensive operations taken from those below to question and dismantle this authority is routinely dismissed as rioting, looting, vandalism—as “crime.” Challenges to this dichotomy are currently being fought in the city—an example of how fragile the illusion of their authority is once the stakes are raised.

狗官 (Police Dogs), a derogatory slang, is sprayed everywhere in the city, especially large and repeated on MTR stations, public thoroughfares, and near police stations. We soon learn that the author (小江 [SiuGong], who signs all of his anti-police slogans) is somewhat of an elusive legend in the movement, leaving his signature characters again and

4. Estimates around this writing put the number of fired canisters around 16,000.

again as sort of a public, ominous message to the cops who have abused their power; *remember my name*. N tells us she saw him briefly one night furiously spraying away and disappearing quickly into the night, his masked face and black clothes enshrining him in mystery. For the remainder of the trip I grin each time we pass another 小江 狗官 tag⁵ (which just so happens to be 15 minutes walking in any direction in Hong Kong).

N later tells us about tear gas: its indescribable smell, the painful cough that persists long after the canister is gone, the switch to the more painful Chinese-made ones, the expiration dates scratched out, the indiscriminate firing on non-participating citizens near rallies.

N and M also tell us about the joys of graffiti: of tagging thought-out and/or spontaneous slogans and drawings in the streets, of being shielded from cameras by unknown comrades and their umbrellas, of walking by their messages in the daytime and laughing at the mistakes, of other graffiti enthusiasts amending and adding annotations, often leaving friendly notes. The walls and streets are alive with these messages, the city simply unable to keep up with the cleaning. The surfaces are alive in dialogue, speaking to each other and each passerby, like flowing blood injected into the lifeless steel and glass symbols of global trade and capitalism.

On Wednesday J takes us to the new territories to visit Ma Shi Po. The small village has been a microcosm of resistance and a point of convergence for farmers and land-de-

5. Many of his tags also incorporate the (V) logo popularized by Alan Moore's graphic novel *V for Vendetta*.

fenders opposing Hong Kong's North East New Territories Development plan. A small organic farm and weekly farmers market serves as a gathering place for supporters and newcomers to come, partake in workshops, and learn about updates in the current developmental plans.

Things in Mapopo⁶ are quiet today during our visit, save for the incessant drone of construction cranes a few hundred meters to the east. We're given a small tour around the village by one of its residents B, and together we share a delicious hotpot for lunch with family members and friends at the small vegetable market in the center. Walking through the narrow concrete path, I'm astounded at the diversity in vegetation and wildlife.⁷ Turning around and gazing south, 40+ story high-rise buildings loom menacingly, an uneasy juxtaposition that makes me feel unwell.

The sounds of construction suddenly remind me of Om Sleiman,⁸ a small organic farm I visited in Bil'in, Palestine. There are many similarities; while Mapopo faces constant eviction from land and real-estate developers, Om Sleiman faces similar threats from the Israeli government and IDF in the name of state expansion and genocide. Both sites are using farming as resistance, a significant action that emphasizes creation—in the form of using the contested land to farm, build, and share healthy communities—instead of the pure resistance tactics seen on the frontline barricades in Hong Kong or stone-throwing youth in Palestine.

6. www.mapopo.wordpress.com

7. Especially birds, many of which have been attracted to this green space and ironically become pests for the vegetables.

8. www.facebook.com/omsleimanfarm

A large banner reads: 耕住合一 (Living and farming cannot be separated)—a fitting slogan that not only opposes the logic of capitalism, but points towards a new way of living. To the residents of Mapopo farming is not a means to an end, but an alternative way to think about and navigate society. How exactly the project at Mapopo fits into the current anti-extradition movement is less clear at the moment, but it feels that the core of their struggle, along with Om Sleiman's, is innately linked with other confrontations against authority around the world.

We bring some vegetables from the farm back to Yau Ma Tei to share with members of So Boring,⁹ a vegetarian co-op and infoshop collective facing continuous harassment from various government bodies for operating autonomously. We share (another!) hotpot with old and new friends in the street sitting on chairs of various shapes and sizes. Stuffed full of vegetables and tofu, I'm grateful and reminded again of how important carved spaces like this is to gather and talk.

For a little while, I speak with D about collective wood-block print-making, and members of Prinhow¹⁰ share a banner they created with migrant workers for migrant pride. Upstairs, prints from Korean activists opposing the naval base on Jeju island are hung up, as are prints we recognize from Tokyo's A3BC.¹¹ There's a strength in printing together, a simple way to build communities and empower people to make their own images embedded with their own

9. www.facebook.com/wearesoboring

10. www.facebook.com/prinhow

11. www.a3bcollective.org

stories. The woodblock collectives are a thread connecting us across borders and oceans, tying together sites of resistance all working towards creating another world. We chat some more, trade zines and drink warm tea, enjoying the pleasant December evening together under the last full moon of the year.

On Friday, we meet with friends and walk south towards the science museum in Tsim Sha Tsui where secondary school students are holding a rally. M gives us face masks,¹² anonymity a concept quickly embraced and expanded upon by participants since the beginning of the protests—practical tools for safety while symbolically emphasizing the strength of a leaderless movement. Many students are already present by the time we arrive, most are wearing black hoodies and jackets over their uniforms as they sit patiently on the ground listening. The rally is a little formal, with speakers taking turns on a stage while being filmed by a multitude of press. Slogans are shouted and repeated enthusiastically,¹³ the infamous black flags are held by solemn looking students, and some passerbys even pose for photos with a LED lit FREEHK sign. Behind the sign, near the edge of the crowd, an older supporter of the movement and friend of M has collected supplies like masks and clothing specifically for the students to take for free.

It is organized well and proceeds smoothly as M quickly translates the Cantonese for us, filling in the gaps with

12. Wearing masks in public was declared illegal by Carrie Lam in the beginning of October.

13. 5 Demands, Not One Less, Stand for Freedom, Stand with Hong Kong.

16 content. However it soon becomes obvious that the students are invariably more interesting and inspiring. Two of the older speakers in particular¹⁴ tread dangerously close to what I feel is a sort of parental posturing; emphasizing non-violent resistance and a faith in electoral politics respectively. I disagree with both of these concepts personally but what feels especially uncomfortable is the top-down stance that echoes failures from previous student-led actions, most recently 2014's "Umbrella Movement." The secondary school students meanwhile, spoke about practical issues; of personal experiences, of solidarity against police violence, of information for the next rally—real horizontal methods of organizing, sharing, and preparing for further actions.

17 While another politician takes the stage my mind drifts towards the news I had been reading about other uprisings around the globe. To forge ahead, Hong Kong cannot be isolated from other similar struggles against governments and their police forces. I think we would benefit to continuously trace the contours between us and emphasize the points of intersection that aim to dismantle all authority. We can connect the poverty¹⁵ in Hong Kong with that in Haiti or Chile, and understand the resulting protest movements as disgust and anger with the same system. We should also acknowledge discrepancies like, for instance, since anti-government protests began in Iraq this year, over 400 protesters, innocent victims, and activists have been

14. Journalist/politician Claudia Mo, politician Raymond Wong.

15. According to official numbers, about 1.37 (18.3%) million people living below the poverty line in one of the world's wealthiest cities.

confirmed murdered by police to little fanfare while a murder by the Hong Kong police, as of this writing, has not yet officially been verified. The disparity in relative coverage about the former deserve to be talked about and challenged with our own media channels in conscious cooperation and mutual aid. Maybe examples of creative resistance like the farms at Mapopo and Om Sleiman can also be linked, and larger sites like the autonomous assemblies in Rojava and indigenous led resistance in Chiapas with the Zapitatstas can also be models to study and apply. While the context in each of these situations are unique, global solidarity can function by recognizing that they all share much more than a common enemy.

A young boy who appears to be no older than 13 takes the microphone and speaks loudly with a passion that rouses the crowd back awake. Sitting on the cool brick ground and looking around I realize I can't remember the last time I've been surrounded by this many young attentive people (not even scrolling on their phones!). At the moment, it's hard to imagine students back in Japan staging an event like this. My eye eventually falls on a young girl in a black face mask. She's walking slowly through the crowd with a bag full of warm buns offering them to anyone who's hungry. The future of this place will lie in the hands of people like her.

18

We're all dimly illuminated by the gigantic billboard advertisements and extravagance of Hong Kong Island across the harbor as endless streams of airplanes fly in low, straight paths above our heads and anti-riot police with helmets and weapons watch warily from the distance. In the middle of this site—a city ravaged by a history of colonialism and capitalism—we all sit together; listening, breathing, flowing, proving that a different life is possible.

19

The continuous struggle of Hong Kongers¹⁶ in the face of such violent oppression and in defiance of a world power determined not to budge is clearly inspiring. There are aspects of the anti-extradition movement I also find alarming, and some, like trends towards nationalism and faith in electoral systems I definitely disagree with. But traveling to the city, learning about nuances in the movement, and hearing experiences from those involved is a privilege and an opportunity to begin understanding and practicing global solidarity. More than anything, we're so grateful for the mutual support from our friends who shared their experiences with us and made this trip possible. Thank you.

16. I use this phrase broadly to include all those supporting the movement, especially the marginalized and those living in the city without resident cards.





Hong Kong Journal
December 2019

IOBBB #28
Printed Spring, 2020

The Institute of Barbarian Books
www.barbarianbooks.institute
info@barbarianbooks.institute

路上から始まる新しい世界。

グローバルな連帯は永遠に続く!



新世界正在街頭展開。

全球團結永誌長存!